

国立民族学博物館所蔵「仏教版画コレクション」におけるにおける大型木版仏画：共同研究：チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究（2015 - 2018年度）

著者	大羽 恵美
雑誌名	民博通信
巻	160
ページ	26-27
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00009039

国立民族学博物館所蔵「仏教版画コレクション」 における大型木版仏画

文・写真
大羽恵美

共同研究 ● チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究(2015-2018年度)

国立民族学博物館(以下、民博)に所蔵される「チベット仏画コレクション」は、1970年代に収集され、1979年に民博が購入した、おもにネパールのドルポ地方で入手された版画と版木の集成である。収集地は明確だが、内容的には仏教、ボン教、民間の習俗にかかわるものが混在し、制作地や種類・用途が種々さまざまであって、原収集者に一貫した収集理念があったかは疑わしい。その中にはチベット語で願が書きこまれる護符や、仏教やボン教の尊格を表す図のほか、大型の木版の仏画も含まれている。

筆者は近年、チベットの仏教説話図に関する研究に取り組んでおり、説話集の翻訳や、日本国外に所蔵される絵画と現地に残る壁画の調査などを行っていたのだが、期せずして、この仏画コレクションの中に、研究対象である仏画の作例を見つけることとなった。それが、『アヴァダーナ・カルバラター』という仏教説話に基づく数片の版画である。

『アヴァダーナ・カルバラター』

民博に所蔵される「チベット仏画コレクション」の中には5点の『アヴァダーナ・カルバラター』の版画が含まれている。ほかの護符などの版画とはサイズや描かれる内容が明らかに異なる大型の仏画で、モノクロであることを除けば、チベットで見られる軸装にする絵画と同じ体裁を具える。その仏画には中央に釈迦牟尼の座像が表され、その周りに王宮、寺院、山や海などの風景が描かれ、そこに釈尊、僧侶、在家の男女、子供、動物が細密画のように描きこまれている。この周りの部分が『アヴァダーナ・カルバラター』という仏教説話を典拠としており、その説話に説かれる場面を絵で示しているのである。

『アヴァダーナ・カルバラター』とは、サンスクリット語の『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』を略したタイトルで、邦訳するなら「菩薩の偉業物語の如意蔓」、チベット語では「パクサム・ティシン」として知られる。元来は11世紀にインドのカシュミールで活躍した宮廷詩人のクシェーメンドラによって編纂された作品で、サンスクリット語で書かれた108章からなる文献である。これがチベットに渡ってチベット語に翻訳されると高い評価を受け、詩を含む文学や、芸術において多大な影響を及ぼした。

タイトルのうちのアヴァダーナとは、譬喩を用いた説話のことで釈尊や信者、仏弟子などの前世と今世の出来事を述べて、因果応報を説く。釈尊だけでなく、信者や仏弟子の過去生にも言及されるため、恋愛や不倫、さらには殺人の話、詐欺話、商売や家庭内のもめごとの話など、仏教の堅苦しい典籍の内容からは想像がつかないような人間くさい物語が語られている。チベットではこの文献を典拠とする絵画作例が非常に多くあり、それらは仏教教化のための絵解きで使用されることもあったとみられている。チベットではかつて、ラマ・マニと呼ばれる旅回りの絵解き師が、村々を回って携帯した絵画を見せながら説法をする光景が見られた。その演目の一つに『アヴァダーナ・

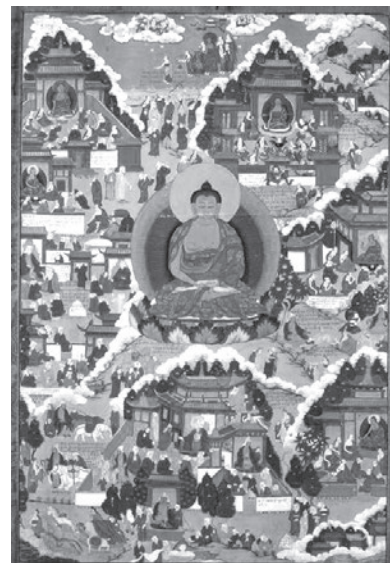


僧院内「アヴァダーナ・カルバラター」を典拠とする壁画、チベット自治区ゴンカルチューデ大集会堂(2005年)。

カルバラター』にも所収されている説話があり、大変好評であったらしい。絵解きの聞き手は、物語の登場人物と、自分や、自分の周囲の人々の行状や人生と重ね合わせて大いに共感し、結末の因果応報の段では仏教徒としての日頃の行いを振り返り、気持ちを新たにしたいのではないだろうか。この書物のチベットにおける人気の理由はさまざまに推測でき、今後の研究の課題であるが、世俗的な内容を含みつつも、仏教徒としての菩薩的な行為を称え、具体的に因果応報を説く物語は誰にでも分かりやすかったことが理由の1つだろう。

仏画セットの普及

『アヴァダーナ・カルバラター』が人口に膾炙した理由として、仏画セットの普及もその一因として考えられる。チベットの寺院や仏塔では、壁面に隈なく壁画が描かれ、あちこちに軸装の絵画が掛けられているのが一般的である。仏塔や寺院を荘厳するために仏像や絵画が用いられるためだが、説話図が表



タンカ「アヴァダーナ・カルバラター」右8、国立民族学博物館所蔵仏画と同じ構図を持つ仏画(ニューデリーのチベットハウス所蔵)。Courtesy of Tibet House in New Delhi

れることが多くある。釈尊や祖師の生涯を表すことも多いが、『アヴァダーナ・カルバラター』の壁画を描いたり、軸装絵画を掛けたりすることも非常に多い(壁画の一例として上写真を参照)。

壁画と同様に、チベットではタンカと呼ばれる軸装の仏画が普及しており、『アヴァダーナ・カルバラター』を典拠とするタンカのセットも作られた(左写真)。複数のタンカで一具とするセットの場合、中央に釈尊などの

主尊を表すタンカがあり、その左右に両辺が同数となる枚数のタンカを一列に配する。『アヴァダーナ・カルバラター』のタンカセットもそのように展示すべく設計され、23幅、31幅、41幅で一具となる3種類のタンカセットがある。さらにそれらのセットに属さない、断片的に所蔵されるタンカがあり、少なくとも4種類以上のタンカセットがあると考えられる。そのうち、41幅からなるタンカは、インドのダラムサラと北京の故宮、及び北京の雍和宮が所蔵する欠けのない完全なセットが現存する。これらは全て手の込んだ肉筆画の作品であり、雍和宮の万福閣に展示中のセットは、グライマ7世からの贈呈品であり、故宮のセットは乾隆帝の命によりチベット仏教の活仏が作成したセットである。いずれも由緒正しい当代の逸品と言える。

他方の31幅のセットは、肉筆画と版画の両方が残っており、作例が非常に多い。タンカの構成と様式は41幅からなるタンカセットに酷似しているため、それをもとに31幅のセットが作られたようである。31幅のセットの肉筆画と版画のどちらが先に成立したかは分かっていないが、版画のセットは18世紀にチベット自治区のナルタンで開版された版木からなることは明らかになっている。『アヴァダーナ・カルバラター』のタンカセットとしては、これがチベットで最も普及した。版画のタンカは、上述の皇帝所蔵の肉筆画とは異なり、繰り返し、多数刷ることが可能であった。31幅のセットの版画版を作った理由は不明であるが、肉筆画とは異なる位置づけがされ、使用されたと考えられる。結果的に、汎用版として普及し、仏教教化のための大きな役割を果たした。

民博所蔵『アヴァダーナ・カルバラター』木版画

さて、民博所蔵『アヴァダーナ・カルバラター』木版画の一例をご覧いただきたい(上写真)。これは31幅からなるナルタンの版木をもとにした木版画のタンカセットの一片である(同じ画題の彩色のある例は左頁の下写真参照)。この版画には、第23章と24章にあたる「シャカ族の物語」と「ヴィシュヴァンタラの物語」に説かれる情景がそれぞれ、絵画中の上部と下部に描かれる。版画の中央の上部には「右の8番目」と書かれており、これは、このタンカが中央の主尊を表すタンカの右側8枚目に配置されることを示す。さらに画面中には2つの章のタイトルを表す題字が書きこまれ、それぞれの場面には説明となる銘文が近くに添えられる。このような情報をもとに、この版画の典拠を同定することは難しくないように見える。しかし、チベットにおける美術史研究が著しく遅れている上に、セットとして存在したタンカが分散して世界各地に断片的に所蔵されたために、典拠が具体的に同定されず、「仏教説話図」などとされるのが珍しくない。

このように一般に普及した絵画でさえ基礎的なデータが不足

している状況であることに鑑みて、本プロジェクトは、コレクションの各作品の記述研究と精確な情報の集積を目指してすすめられている。したがって、民博コレクション内の『アヴァダーナ・カルバラター』は版画の典拠が明らかになるのはもちろんのこと、それが108章あるうちのどの物語を表すかが示される。さらに絵画で表されるそれぞれの場面についても文献の記述との照合が行われる。場面の同定が文献に基づいて明らかになれ

ば、物語のあらすじやあいまいな伝承に基づく記述とは一線を画することができる。これはこれまで等閑視されてきた仏教版画の研究においては大きな意義を持つ。なお、『アヴァダーナ・カルバラター』を表すナルタンの版木は失われてしまって今はない。民博所蔵の版画作品そのものが貴重な標本資料であると言える。

進捗状況と今後の展望

民博コレクションの中に断片的に『アヴァダーナ・カルバラター』の版画が所蔵されることはいくつかの興味深い点を提示する。一つはこれまで指摘されているように、この版画が広く流布していたことを証明していることである。さらにもう一つは、このような仏画が護符やボン教の白描図とともに所蔵されていることである。これは、仏画が寺院の荘厳のためにおもに出家僧たちによって使われてきたというだけでなく、在俗の絵解き師や在家信者の手によって、何らかの意図をもって使用されてきたことを意味する。そし

て、その使用法は美術史的に価値の高い肉筆画の仏画とは異なるのであろう。

これまでのこのような仏教版画の研究は、美術史や仏教図像学の研究者によってなされることがほとんどであった。そのアプローチによって解明できるのは、上述したような絵画のテーマやその典拠、絵画様式、そこから導き出される成立年代、美術史上の位置づけなどである。いっぽうで、版画の用途や経済的位置づけ、版画をめぐる宗教実践と現代的意義は不問に付されてきた。

現在進行中の本プロジェクトには言語学、仏教学、文化人類学などを専門とする多様な研究者が関わっており、さまざまなアプローチを可能にしている。仏教版画についても複数の視点からの検討と記述が着実に進行中であり、従前の研究にはない成果が期待される。コレクション全体の基礎的記述資料が調べば、本コレクションに対する新しい視座が開拓され、本資料の共同利用に資するところが大きいだろう。

おおば えみ

金沢大学学内国際文化資源学研究中心客員研究員。専門は仏教美術史研究。本プロジェクトに関連した論文に、引田弘道との共著「ゴーシラ物語—「ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター」第35章和訳」(『愛知学院大学文学部紀要』第46号、2016年)などがある。